

「安全検討会」の中間まとめを前に

文部科学省登山研修所への要望書

「安全検討会」は4月30日をもちまして第5回を終了し、中間報告のまとめに入ることになりました。これまでの会議を傍聴させていただき非常に危惧を覚えております。と申しますのは、大日岳遭難訴訟の和解条項（名古屋高裁金沢支部 07/7/26）の前文で示された「本件事故原因に関する事実を踏まえて、本件事故と同種の不幸な事故が再び発生することがないように十分な安全対策を検討した上で、本件事故を教訓として、若い世代に山の文化を安全な形で継承し発展させていく」という文言が無視され、委員の先生方に伝えられていないと思われるからであります。

私どもは、2000年の大日岳での事故は主催者側のマンネリズムと油断により起こるべくして起こったもので、この点に対する反省を置き去りにして安全検討が進められるならば、いくら素晴らしい体制を作ろうとも、事故の再発は避けられないと考えております。あの事故があたかも不可抗力的な事故であったかのように、研修実施地域や研修実施時期の適否、参加学生の資質低下の有無など抽象的、一般的な議論がすすめられるのを見るにつけても、大日岳遭難事故の真の原因が何だったのかを置き去りにした対策検討と、不満を覚えざるを得ません。もちろん、年度や講師によって、実地での雪底に対する注意喚起の仕方が異なっていたことが明らかにされている（都立大ワンダーフォーゲル部 OB 会による事故調査報告書）点などを考えますと、シラバスの作成などは極めて重要かつ不可欠な提案がなされていることも確かです。しかし、平成13年2月に（文部科学省から？）出された『北アルプス大日岳遭難事故調査報告書』で示されている下記の事項が実地に守られ実践されていたのかどうかがいまいなまま、検証もないままでは、私共は今回出されることになっている「安全検討会」の『報告書』に納得することはできません。真摯かつ責任ある回答を「安全検討会」に報告し、中間まとめに反映して頂くように取り計らわれんことを強く要望いたします。

2008年5月8日

内藤悟・万佐代
溝上不二男・洋子

記

『報告書』で謳っている安全対策

- 1... 冬山研修会は、登山の専門家を含む有識者で構成された専門調査委員会で検討され、指導助言も得て実施されている。（p.17）
2. 大日岳という特定された山を継続して研修場所とすることにより、この山に

関する知識及び経験の集積を図る。(p.18)

3. 講師研究会を行い、研修会実施の諸問題を検討するとともに、講師の資質の向上を図る。(p.18)
4. 山頂付近の雪庇を回避し安全を確認する方法... ①地形図を参照し、地形、地物等を観察することによる山稜の想定... (p. 41)
5. 山頂付近が雪に覆われた場合における登路選定のための山稜の想定は、地形及び地物の観察に加えて、いわゆる雪庇の張り出し状況を基礎になされるのが一般的であり、主稜線付近を登高するのが常識的なルートである。(p.41)

登山研修所に明らかにして欲しい点

- ・ 1. 3. について具体的に毎年どのような会議が開かれたのか。また、その議事録はどうなっているのか。大日岳頂上付近の雪庇の大きさが例年30メートルを越えていること、事故当日も山稜想定に役立つ地物が確認できたはずであることなど、2.が真剣に行われていれば重要な情報として記録されているはずではないか。
- ・ 4. 5. がうたい文句におわり、講師たちが経験則のみに頼ってルートを選定した結果、漫然と雪庇に侵入し、休憩したために、崩落を招いたのではないか。研修の現場では、雪庇回避の方法が、研修生に教授されなかったばかりか、実践もされなかったのではないか。この点を正直に明らかにして頂きたい。